

報告者: 中土佐一現代美術プログラム「た、たら、」実行委員会
高橋健悟さん、松木真太郎さん(オンライン)

■ 報告 ■

昨年度に引き続き中土佐町内にて、主に現代美術的な表現を行う作家を招聘し、滞在・製作・発表という形で企画を実施させていただきました。

まず、展覧会の概要を話した後、来場者の推移と作品について。その後、展覧会を終えての所感を報告させていただきます。

事業の概要についてですが、本展は「たたらを踏む」という熟語から着想を得た「た、たら、」というタイトルで実施しました。出品作家は計5名で昨年の10月11日から11月1日、会場は中土佐町大野見庁舎、土佐久礼駅、黒潮本陣、上ノ加江公民館の計4カ所で実施し、前年度の「上ル。」展よりエリアを広げた展示となりました。また、関連企画として「十月」というギャラリーで「大木裕之個展」を開催しました。

次に、来場者の推移ですが、約500名の来場となりました。前年度と比較して増加した理由については、高知市内や南国市、香川や徳島など町外県外からの鑑賞者が増加した、中土佐町内の複数会場を巡ることで街並み・食・景色をセットで楽しむ流れを創出できた、この2点が大きな理由であると考えております。

次に、各展示作品について軽く紹介させていただきます。まず、麻生二葉さんですが、彼女は現在佐賀を拠点に活動している作家で漆を使った作品を製作しています。本展は他者と枝をテーマに上ノ加江公民館を担当、大野美町役場で展示をしていただきました。次に幾野雄也さんです。彼は高知市で「十月」というブック&ギャラリーを主宰しています。本展は大野見町を实际フィールドワークしてもらい、幾野さんが感じたことと大野見の史実を織り交ぜながら作品を展示していただきました。次に遠藤梨夏さんです。現在、佐賀大学の大学院に在籍しています。土佐久礼駅と大野見町役場でのフィールドワークで着想を得た映像作品を展示していただきました。次に大木裕之さんです。東京や高知などに多くの拠点を持つ作家で、本展は2014年に中土佐町立美術館で展示された「久礼」という映像作品を始め、インスタレーション作品を展示していただきました。次に、高橋健悟です。彼は現在大野見で地域おこし協力隊をしながら生活しています。中土佐町役場と黒潮本陣でロッカーと大黒柱を用いたインスタレーションや画面に映っている風車と落石を用いたインスタレーション作品を展示しました。

次に、展示の所感についてですが、鑑賞者のコメントについて、「普段行けない知らない高知を知れた」「美術について知る契機になった」「現代美術に触れる機会になった」という前向きな声をいただいた一方で、「美術は難しい、分からない」「観に行くのが難しい」「こんなの美術じゃない」などの今後の課題に繋がる声もいただきました。これらの声や実施からの所感は、展示の実施自体は、連携を取りながらスムーズにすることが出来た一方で、展示期間中や展示前の広報やコミュニケーションの工夫はもっと必要であると感じました。また、バリアフリーについても展示機会の平等性を考える上では、もう一度再考すべき課題であると感じました。更に展示の評価についても来場者数のみでは測れないものも課題にあると思いますので、評価についても今後もっと具体的に考えていく必要があると感じました。これらの所感を受けて、来年度は広

域に及ぶ展示ではなく、大野見にエリアを絞ってより住民の方々とのコミュニケーションや親交を現在以上に計ることが出来る展示をしていきたいと現在は考えています。もともと今回企画をする上で掲げていた課題が着々と今進んでいるので、今後とも皆さんよろしければ大野見、遠方になりますが訪れてみてください。よろしく申し上げます。

■視察委員からの意見・質問■

面的な広がりが出た一方で、来場者の方とのコミュニケーションが希薄になったとかーそもそも懸念されていたところだとは思いますがー実際それが分かった。少し気になったのが、例えば、黒潮本陣での作品について、やや鑑賞者に鑑賞(現代アートであるがゆえに作品の本質や制作意図を知りたい)を任せたとこがあり、そこをどう反省されたのかなと気になりました。(吉岡一洋委員)

ー基本的に大野見庁舎以外は監視はなく、黒潮本陣さんなら黒潮本陣のスタッフさん、上ノ加江公民館であれば上ノ加江公民館のスタッフさん、JR土佐久礼駅であれば観光協会の方に監視と周知をお願いしております、その時に鑑賞者の方との関りが、作者、スタッフ不在なのでやりとりが出来ないじゃないか、ということだと思います。想定としては、久礼、上ノ加江に行った後に大野見に行く周遊ルートが多いのかなというところで、最終的に大野見庁舎で作品の感想のやり取り等が出来ればなというところだったのですが、実際には、密にコミュニケーションはなかなか難しく、こちらから積極的に話しかけるということでもなかったもので、ご指摘いただいたような、美術館と何が違うのだということは甘んじて受け入れないといけないのかなとは思いました。ただ、美術館での鑑賞との違いという点だけ、補足的に自分の意見を述べさせていただきますと、美術館というのは作品を理解する場というところに重きが置かれている、ホワイトスペース的な、文脈との切り離しというところがあると思うのですが、今回展示していただいた作家、僕も含めて、文脈との接続の中でどの様な表現があり得るのかというところがありましたので、空間も含めて観ていただくような媒介として作品があるのではないのかな、というのは自分なりに思ったところではあります。ご指摘の、任せっきりというのは良くないのではないかなというは次年度に向けて対策したいなと思います。

もう一点質問なのですが、例えば小中高とかー高校はないのですがーそこの連携とか教育プログラムの開発のようなところで、アーティストも若手が多く、ディレクションした人も若手ですし、まだまだ広がり、深まっていく要素がある分、どのような計画があるのか教えていただけたらと思います。

ー教育プログラムの件も、実施前に美術館との連携等も検討させていただいたのですが、今年度の企画では盛り込みませんでした。企画自体はもう動きつつあるのですが、大野見に多目的な文化スペースというのを4月、5月あたりを目途に設置する予定です。そこで、次年度の芸術祭のKAP助成が取ればですが、その中での企画でワークショップを共同で行ったり、あと、次年度も作家に声掛けもしているのですが、その作家さんが高校の先生なので、美術部の生徒とも連携していけたらな、と青写真ですけれども計画しています。